

法政大学図書館

「進取の気象」あふれる法政大学にも、長い歴史の中で法政大学にゆかりのある先人たちから寄贈を受けるなどした知の遺産の数々が保存されています。とくに市ケ谷図書館には、誰しもが驚く貴重な蔵書があります。開架に並ぶ図書だけを見て侮るなかれ！ここでは、その一端をご紹介します。

URL <http://www.hosei.ac.jp/library/collection/>

●●● 正岡子規文庫

俳句・短歌と、日本の詩歌を革新したことで名高い正岡子規(1867-1902)が所蔵していた書籍が2,000冊余、貴重書として保管されています。子規の没後、その蔵書を守り伝えた門人寒川鼠骨によって1949年に法政大学に寄贈されました。これには、子規との交友が知られる夏目漱石の門人で、この時、法政大学の総長であった能楽研究家で英文学者の野上豊一郎、教員の田村輝雄らの尽力があったといえます。自筆ノート類の他、子規が力を入れていた俳諧の書籍を中心に、中国で刊行されたものも含めて数多くの漢詩文の書籍、写生を唱えた子規らしく関心が高かった絵画関係の本、また、明治の知識人らしい英文の書籍など、多種多様な書籍が多数含まれています。熱心に読み込んだらしく、それらにはときに子規の書き込みが見られることも貴重です。

これらの文庫の書籍は市ケ谷図書館で閲覧できます。希望日の前日までにB1階閉架カウンターで希望図書を指定して申し込みましょう。



学生時代の
子規のノート(自筆)



中国明版『古今小説』

馮夢竜編の口語(白話)による短編小説集。上田秋成『雨月物語』をはじめ多くの日本の作品に影響を与えたことが知られています。世界に3点しか現存しないとされる貴重な典籍です。



『父の恩』

二代目市川團十郎が父の初代団十郎追善のために編んだ俳書。錦絵(多色摺り浮世絵)以前の色刷りの技術をうかがわせる貴重な書物です。

●●● 和辻哲郎文庫

「和辻倫理学」として知られる独自の思想体系を築いた和辻哲郎(1889-1960)の旧蔵書です。和辻と聞いてピンとこない人も、『古寺巡礼』(1919)の著者といたら分かるでしょうか。かつて法政大学文学部哲学科で教鞭をとったこともある和辻の没後、その夫人照の意志によって、友人で法政大学文学部哲学科教授谷川徹三(後に総長、詩人・谷川俊太郎の父)を介して、一括して寄贈されました。

和・洋併せて5,000冊におよぶその蔵書には、随所に疑問や論評などの書き込みが見られ、それらを通して、宗教や古典文学、芸能、風土など多岐にわたる広い視野から日本人の精神史を捉えた和辻の思考、研究の跡がたどれる点が何よりも貴重です。



『カント全集』に挟まれていた和辻自筆メモ

●●● 三木清文庫

本学の教授を務め、治安維持法違反の嫌疑を掛けられて獄中で非業の死を遂げた哲学者三木清(1897-1945)の旧蔵書8,000余冊です。人生の諸要素を考える手がかりとして今も広く読み継がれる『人生論ノート』で知る人も多いでしょう。京都で西田幾多郎に、ドイツでハイデggerに学んだ三木の膨大な蔵書は、その半数近くが洋書で、当時のドイツ哲学文献の宝庫です。三木の没後、遺族に守られていたものを1950年に本学図書館が購入しました。

本学多摩図書館には、三木と同じく西田門下で、三木の跡を継いで本学教授を務めた戸坂潤(1900-1945)の旧蔵書約1,500冊も収められています。



三木清旧蔵書



法政大学図書館編,1991,『法政大学所蔵文庫案内』法政大学



牧野英二,2010,『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ! 和辻倫理学の今日的意義』法政大学出版局

野上記念法政大学能楽研究所

能楽といえば、日本を代表する伝統芸能。2001年には、日本の伝統芸能としては初めてユネスコの世界無形文化遺産に登録され、いまや日本ばかりではなく、人類が共有すべき「無形遺産の傑作」として注目を集めています。

この能楽の研究で世界中に知られているのが、ポアソナード・タワー 23階にある野上記念法政大学能楽研究所です。本学の元総長・野上豊一郎博士を記念して1952年に創設されたこの研究所は、能楽を専門とする研究機関として、長い歴史と実績を誇り、世界の能楽研究の一大拠点となっています。

ここには能楽の歴史を伝える数多くの貴重な資料が保管され、いまでもその整理と研究が続けられています。

①金春禅鳳筆謡本

能のテキストを「謡本」といいます。能の文章(詞章)は、舞などの演技を伴わない「謡」という形式でも楽しまれていました。研究所には室町時代から現在までの謡本が、数多く所蔵されています。



②『信長朱印状』

有名な「天下布武」の印がある織田信長の朱印状。観世彦右衛門という能役者に信長が領地を認める、という内容です。能は時の権力者の後援を受けて大きく発展しましたが、研究所には、そうした能の歴史に関わる資料も数多く所蔵されています。

①



②

③新作能「草枕」

能楽研究所は能楽界と協力し、今は上演されなくなってしまった古い能の復活や、能の技法を用いたまったく新しい作品の上演などもおこなってきました。写真の「草枕」は、夏目漱石の小説や詩を素材にし、2002年に初演された新作能です。



③



④

④『風姿花伝』

世阿弥の最も代表的な著作で、「花」という言葉をキーワードに、能役者が心得るべき演技の心構えを記した理論書です。役者による演技論としては世界で最も古いものですが、実際の舞台経験に基づいた高度な内容は、今も高く評価されています。

⑤『二曲三体人形図』

研究所には、能をどう演じるべきか、理論や実際上の注意を記した「伝書」類も数多く集められています。これは、能の大成者世阿弥が能の演技を絵入りで説明した伝書です。世阿弥時代の能の姿を教えてくれる貴重な資料です。



⑤

URL	http://nohken.ws.hosei.ac.jp/
所在地	市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 23階
利用可能時間	火・木 9:30~20:00 / 金 9:30~16:30(11:30~12:30の昼休みは閉室) (夏季・冬季休暇期間・年末年始・入試期間・年度末・授業期間外は除く)

大原社会問題研究所

大原社会問題研究所は1919年2月9日、岡山県倉敷の実業家・大原孫三郎によって大阪天王寺に創立されました。社会科学系の民間研究所としては日本で最も長い歴史を有しています。大原氏は倉敷紡績などの事業を営むかたわら大原美術館、倉敷労働科学研究所などを設立した異色の実業家です。彼は岡山孤児院の創設者・石井十次の事業を経済的に支え、その死後は石井記念愛染園を大阪に設けて貧困児童を対象とする夜学校を経営するなど、社会事業にも熱心な人物でした。しかし慈善事業の結果に失望し、社会問題の解決にはその根本的な調査・研究が必要であると考え、研究所の創設を決意しました。

研究所の初代所長には東京帝国大学経済学部教授高野岩三郎が就任し、彼の下に櫛田民蔵、権田保之助、森戸辰男、大内兵衛、久留間鮫造、宇野弘蔵、笠信太郎らのすぐれた研究者が集まりました。研究所はまた、大



大原孫三郎



高野岩三郎

原孫三郎の資金援助のもと、研究員をドイツ、イギリスなどに派遣し、膨大な社会・労働関係図書や機関紙誌を購入しました。これらの図書は、広く一般に公開されています。

法政大学には1949年に合併されました。

大阪天王寺 時代の研究所

ベルギーのソルヴェー
研究所を模して建て
られました。



アダム・スミス,1776, 『諸国民の富』 初版

本書は、産業革命期の前夜に執筆されたものであり経済学の古典中の古典です。スミスは「経済学の父」と呼ばれており、自然・人文・社会の諸科学の領域に属する広範な問題を論じました。



ポスターコレクションの一部



研究所は社会問題研究の一環として、選挙ポスター、労働組合や農民組合のポスター、さらに労働争議や小作争議のときにあちこちに貼られたステッカーなどを大量に収集しました。原資料やポスターは、当時何が叫ばれ訴えられていたのか、直接知ることができ貴重な資料です。これらは研究所公式サイト

資料検索で関連情報を得ることができますし、実際に閲覧もできます。

柳瀬正夢の手 やなせまさむ



1923年の第一次共産党事件と関東大震災の衝撃のなかで、日本共産党は24年春解散しました。その後、コミニスト・グループによって25年9月『無産者新聞』が創刊されました。創刊と同時に柳瀬正夢が専属画家となります。柳瀬はドイツの漫画家ゲオルグ・グロックスを知り、大きな

影響を受けました。力強い線と躍動的なポーズがそれです。

カール・マルクス,1867, 『資本論』 第1巻初版

本書は、マルクスが自筆でクーゲルマン宛てに献呈の辞を書いた文字通り世界で一冊しかない献上本です。世界に100冊しかないと言われる初版のうち、研究所は、他に2冊、計3冊を所蔵しています。



ドイツ1848年革命 の壁新聞

1848年2月、フランスに「二月革命」がおり王政が倒されました。この事件はただちにドイツ、オーストリアに波及し「三月革命」の勃発となります。この革命で検閲が廃止され言論の自由を獲得した民衆は、当時普及しつつあった印刷技術の助けをかりて大規模に壁新聞やビラを発行しました。



URL	http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/
メールアドレス	oharains@adm.hosei.ac.jp
所在地	多摩キャンパス 図書館・研究所棟5階
電話番号	042-783-2305
利用可能時間	月～金 9:00～16:30 / 土 9:00～11:30

沖縄文化研究所

沖縄文化研究所は、沖縄が日本に復帰した1972年に設立されました。かつての琉球王国(奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島)に根づいた独特な沖縄文化を、多彩な視点・方法から総合的に調査・研究し、東アジア周辺地域の諸文化の中に位置づけつつその特質を明らかにする

ことを主な目的としています。国内における沖縄研究の拠点として、世界中の研究者を結ぶ情報ネットワークセンターという役割も果たしています。

研究所では、様々な調査研究活動を行なうとともに、定期刊行物として、紀要『沖縄文化研究』や琉球語を探索し記録する『琉球の方言』、貴重な史資料を翻刻・収録する『沖縄研究資料』、研究所の活動記録や研究上の情報交換を目的とする『沖縄文化研究所所報』などの形で発信しています。また『叢書・沖縄を知る』シリーズの監修・刊行もしています。

研究所には資料閲覧室が併設され、所蔵する図書、新聞・雑誌、貴重文献資料などを閲覧、利用することができます。また学部生の通年講義として「総合講座 沖縄を考える」を開催し、国内外からゲスト講演者をお呼びして一般市民と共に学ぶ場を設けています。

琉球舞踊・組踊

沖縄文化研究所では、東京で観る機会の少ない沖縄伝統芸能の鑑賞の機会を提供しています。これまでに、人間国宝保持者の宮城能鳳氏みやぎのりほうによる琉球舞踊や、沖縄芝居実験劇場による組踊などを上演しました。



しまじょうが 島常賀作のシーサー

沖縄の伝統工芸の名工、島常賀(1903-1994)作のシーサー。法政大学校友会沖縄支部から寄贈されました。



いはふゆう 伊波普猷資料

伊波普猷(1876-1947)は、人文・社会科学のあらゆる側面から沖縄研究を展開し、いわゆる「沖縄学」の基礎を築きました。「沖縄学の父」と称されました。沖縄文化研究所には、「沖縄歴史物語」「おもろ覚書」「おもろ語彙」などの直筆原稿を所蔵しています。

そなんけ 楚南家文書

琉球王国久米村の士族、楚南家に伝えられてきた18世紀から19世紀の漢籍です。中国との外交に関する実務段階の貴重な下部文書が多くあります。ほかに、中国福建人が官話(標準語)を学ぶための教科書であった『新刻官音彙解釋義音中』『新刻官話彙解便覧』『較正官音使途必需雅俗便覧』が揃っています。2013年度に修復作業が完了しました。



中野好夫記念文庫

英文学者の中野好夫(1903-1985)が私財を投じ主宰していた「沖縄資料センター」の資料が法政大学に移管されたことが沖縄文化研究所設立の契機となりました。1960年代の機関誌、ビラ、チラシなど米軍占領下における沖縄を知る上で貴重な資料が多く含まれています。



URL	http://www.hosei.ac.jp/fujimi/okiken/
所在地	市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 21階
電話番号	03-3264-9393
利用可能時間	月・水・金 9:10~20:00 / 火・木 9:10~17:00 (11:30~12:30の昼休みは閉室) (土日、祝日以外で入学試験等による臨時閉室があります。)